

第 51 回 若手研究者・院生情報交換会 報告

テーマ：これからの社会福祉研究を考えよう！

開催日時：2022 年 11 月 26 日(土) 13：30～16：00

会場：大阪公立大学杉本キャンパス 杉本図書館 10F 研究者交流室

報告：石堂峻生（大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程）

第 51 回若手研究者・院生情報交換会が、2022 年 11 月 26 日(土)の 13：30～16：00 にて開催された。第 46 回以来、約 3 年ぶりの対面形式での開催となり、参加者は 19 名であった。テーマは「これからの社会福祉を考えよう！」で、全員参加によるワークショップをメインに実施された。

まず、関西地域ブロック担当理事の所めぐみ氏(関西大学)からの開催挨拶から始まった。挨拶では、コロナ禍にあって、若手研究者や院生間のネットワークの形成が十分にできなかったことが挙げられ、約 3 年ぶりの対面での開催にあたり、改めてお互いに刺激し合えるネットワークが形成されることを期待したいということが語られた。

次に、進行の鶴浦直子氏(大阪公立大学)より、月刊福祉や社会福祉研究のタイトルを用いて、近年の研究トレンドを確認し、これからの社会福祉研究を考えていくうえで、自然環境の変化、感染症の問題、情報通信技術の発展、人口減少社会など、社会福祉が前提とする社会の変化に着目しなければならないことが提示された。

その後、コメンテーターの所道彦氏(大阪公立大学)より、近年の社会福祉研究の課題として、専門職の視点に偏りすぎていないか、あるいは、現在の制度の枠組みの中だけで考えていないかといった問いかけがあり、社会における全体性や問題の背景など、広い視野をもって研究することが求められているとの話があった。そして、社会福祉は、本来、学際的な研究分野であり、社会福祉以外の分野にも関心をもつことや国際的視点を持ちながら研究することの重要性が指摘された。

以上をもとに、研究者としての視野を広げ、これまでの研究にとらわれず、ニュートラルに議論を行うことを目的にワークショップが行われた。ワークショップでは、4つのグループに分かれて、提示されたテーマ（AI/SNS/ロボット/自動運転/マスク警察/オンライン会議/在宅ワーク/二拠点住居/メタバース/スマートシティ/脱炭素社会）から、グループごとに1つテーマを選び、「選んだテーマ×福祉」でこれからの社会福祉研究を企画する検討を行った。以下、各グループが検討し、報告した企画内容について簡単に紹介する。

第1グループは、「SNS×福祉」をテーマに「SNS上でアンチコメントをする人の福祉観について」という研究企画を発表した。近年、SNSが発展する中で、その匿名性により、対面では言えないようなアンチコメントが表出化される課題がみられる。そのコメントには、福祉の支援を受けている人たちに対するものも多く散見される。そこで、なぜそうしたアンチコメントをするのか、どのようにアンチに至るのかというアンチコメントをする人たちに焦点を当て、その人たちの福祉観に迫るといったものであった。

第2グループは、「スマートシティ×福祉」をテーマに「スマートシティにおける情報アクセス状況について」という研究企画を発表した。スマートシティの定義の多様さのなかで、スマート

シティの取り組みを整理し分析する必要性があること、また、スマートシティにおける技術や機能を十分に使いこなすことができず、排除される可能性が生まれる人たちもいるのではないかという問題意識から、スマートシティの現状を明らかにするという報告であった。

第3グループは、「在宅ワーク×福祉」をテーマに「在宅ワークから考える就労の意味」という研究企画を発表した。新型コロナを機に在宅ワークが社会に広がっているなかで、人間関係や場所にかかわらず働くことができるなどのプラス面とともに、孤立が生まれる、承認や役立っている実感を得られないなどのマイナス面も考えられる。そこで、在宅ワークをしている人にインタビュー等を行い、人間にとっての就労の意味とは何かを改めて考えるというものであった。

第4グループは、「ロボット×福祉」をテーマに「ウェルビーイングを促進する上でのロボット活用」という研究企画を発表した。ロボットは、これまで身体的なものを補うもの、人材不足を補うものといった人の代替物として考えられていたが、気を遣わなくてもいいといった人間にはない、ロボットだからこその特徴に焦点化してデザインするというものであった。

ワークショップでの研究企画の検討は、約1時間と限られた時間もあり、初歩の段階で終わってしまったが、マイノリティーに焦点を当てていたり、社会構造に関心を向けていたりするなど、参加者によって重視する視点や持っている知識や情報の違い、研究方法のアイデアの多様性などを感じることができた。そして、そうした者同士が共に考えることで、個々の関心や知識を超えて、研究のアイデアが広がっていくことを実感することができた。そして、異なった研究を行っている者同士で新たな社会を構想して研究を考えることに重要な意味を感じた。

また、各グループが選んだテーマからもわかるように、情報通信技術の発展に多くの関心が寄せられていた。しかしながら、今回、ワークショップでの研究企画の具体化が十分にできなかったことからわかるように、情報通信技術等に関する知識の不足など、私たちには多くの課題あることも実感した。ここに前半で指摘されたように、前提とする社会の変化に敏感であること、社会福祉分野以外の研究者も含め、学際的に議論を行っていくことが改めて必要であると考えることができた。

今回の情報交換会は、多くの時間をワークショップ形式で行うといったこれまでにない内容であった。約3年ぶりの対面形式での開催ということも相まって、ワークショップでの対話は、オンラインとはまた違う空気感で、それぞれの研究者の想いや価値観を肌で感じることもできた非常に学びのある機会であった。

総括では、コメンテーターの所道彦氏より、学会の機能としては、研究発表だけではなく、ネットワークづくりも重要なものとしてあり、若手研究者や院生にはそのネットワークを活かして、横につながってうねりを作り、様々なテーマに挑戦してもらいたいとの激励をいただいた。今回、終了後の懇親会は実施されなかったが、名刺交換などが行われるなど、若手研究者や院生にとって、ネットワーク形成の大きな第一歩となる大変有意義な情報交換会となった。